

第3回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【大賞】

「文箱の中」 福岡県 箱崎 八郎

大正元年、江東区深川生まれの母が死んで二十年になる。よく関東大震災の話をしていた。隅田川の橋が落ちてガス管か水道管だけが対岸に繋がっていた。

猛火に追われその鉄管を伝って深川から日本橋の方に渡った。十二歳だった母は祖母が穴あき銅貨をヒモで繋いだ錢輪を首にかけて鉄管を這って渡ったその錢輪の重かったことをよく語ってくれた。家財道具は祖母が背負ってガス管を渡ったらしい。その時運んだ金時絵の文箱が残っている。浦島太郎の玉手箱のように絹の紐で閉じてある。開けると煙ではなく鼈甲の簪と一枚の戸籍の写しが入っていた。士族永井鐵太郎二女フミと母の名が記してあった。

「うちはお侍だったのか」

「そうよ。お旗本だったのよ。貧乏だったそうだけだね。永井のおばあちゃんによく聞いたよ」

中学生のころ、九つ違いの姉がそんな話をしてくれた。

御一新で禄を失い。その日から食うに困ったひい祖父さんが家財道具を売って米に変えていたそうだ。文箱はその売れ残りだった。住んでる家を売りに出したら売れずに、一部を解体して錢湯に薪として売ったと言う。そのひい祖父さ

んの身内みうちに上野の山の戦いに兄弟で参戦して敗走はいそう、土方歳三ひじかたとしぞうのように五稜郭ごりようかくまで転戦てんせんした人がいたと聞いていた。敗戦後北海道に残り、漁業に従事してニシン漁りようで当てる、ニシン御殿ごてんを立て、ずいぶん羽振りはぶが良かったそうだ。関東大震災で焼け出された母の一家は函館までお世話になりに行つたと聞かされた。

愛読していた子母沢寛の〈新選組始末記しんせんぐみしまつぎ〉の巻末に尾崎秀樹おつぎが書いた解説を思ひ出させる。子母沢寛のお祖父さん、梅谷十次郎うめやじゅうじろうは上野のお山の戦いに参加し、敗れて函館の五稜郭で政府軍と戦った。投降とうこうして苦勞の末に網元あみもとになって敗残兵の仲間とニシン漁場で一家を成したと書いてある。ひよつとして、その仲間の中に、永井のひい祖父さんの身内がいたのではないだろうか。あまりにも話が似ているので驚きながら、子母沢寛という作家に親近感を抱くようになった。子母沢寛も育ての親、祖父、梅谷十次郎の残影ざんえいを追って本所深川界隈ほんじよ かいわいを歩き回り、小説おやこだか〈父子鷹かつこきち〉の勝小吉かつこきちにその姿をダブらせたに違いない。私も閑ひまを見ては古本屋で買った江戸切り絵図えずを片手に幕末期の本所深川地区ほんじよ たいんさくを探索して歩いた。絵図の中に永井某ぼうの住まいを見てはひよつとしてこの中にひい祖父さんの名前があるのではないかと子母沢寛の心になって歩いていく自分がいた。富岡八幡宮前とみおかはちまんぐうのお店で、名物深川井どんを食って上野公園まで足を伸ばした。境内けいだいの片隅へしんに戊辰戦争黒門口せんそうくろもんぐちでの戦いの戦死者の慰霊塔いれいとうがあった。幕府側の戦死者の中に永井角之進かくのしんという名に行き当たって仰天ぎょうてんした。

「やはり居^いたのだ。永井のひい祖父さんの身内^いが彰義隊^{しょうぎたい}に」

子母沢寛氏と心が繋がった一瞬だった。